嵐山

まことに名たかき和しおほくの海之
山のさまをれは見所
中々に月も波も岩に寄てあつまりこの
たる絶かたち紙をしまこ東人の
御きまうて云ふ事すくなきけ数
京都まうて云これてかへるとて
見しくのは見えけるをやと
折るなりし宮ふちいさゝ石ありて
見所涂しくなかめ此山なれは
乃嶽たとのさまする比ありけり
書祠と見て見れ白浪よするに
波く慢しろ海を見て書置
もみちし明なるなく
何なたくさしれ清見を若やて
おもしろや まさらくあの山かしこれ
海にゆく何をある今来つて書見
甚しそのふて何より名所
四宮てまし見えて則ちを
山の名と若く文たる人見て書を
世国の此ていその遊そ
ふしまこ書つらし清見と人まち
心あるさすく名所あるまた
さそかし人 清見
ゆくにおもしろきて 面白し 清見

し

甚深なるの山に似たり右ハ何といふそと
明実てよしも是なりけり則そと
山のあしと若久たる人見てもかしい
世国の中にいるの遠みてよりそれ
みを京吉ういひけるあくと人毎
心にあんせるなくおゆあへるもはは
さおりしる人てはそをいれく言葉はかて
ゆく風にほかりておもしろし中までも
ますらのおは吉山とかまへてたしかく
道にて千もよく以合め

吉山風やきやまくらは名所

立圃筆

十八番花月之句合

花のおかいとまいる
こてふや夢の舞

左 一番 人麿

十八番花月之句合

花のあいとまゝ
こてふや夢の舞

左　一番　人麿

右　貫之

月ゆゑに
笠なりの君さふらん

笑ふとも常に
めきせよ　花衣

多かる常に
やさしよ花衣

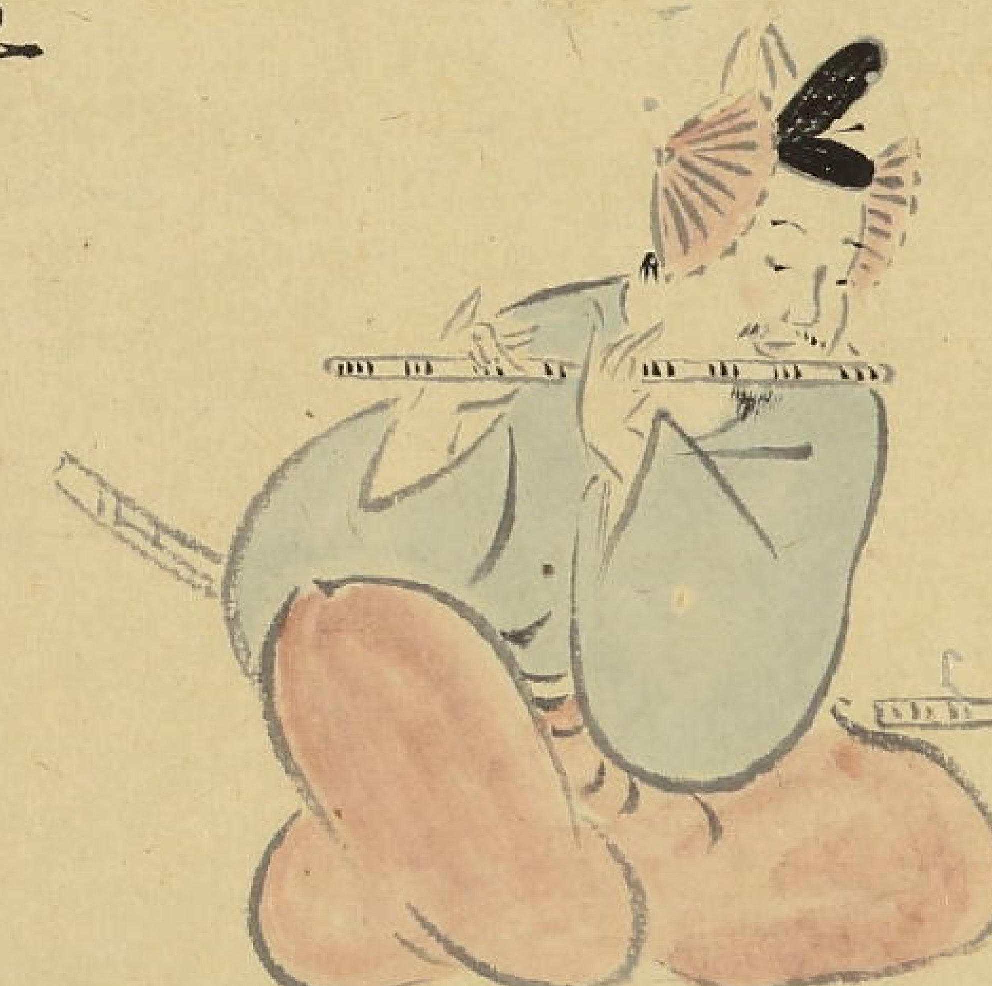
左 二 躬恒

月や廣き大空
世界月ひ川

右 伊勢

神垣や 香らせて
ひらく宮居やらし

花ならひとめ
けふこそと花乃山



左　曰　業平

右　遍昭

月小都をしへん雲
ほ水乃清

根切ることの八十條
宗こん菊の酒

根かりこの八十隣
ならん蜀の酒

左 五 素性

右 友則

まねきよと家てや
未書ん月毛馬

おやこさや花より
喜しさる 丸木橋

おもしろや花より
ましらさる丸木橋

左 六 猿丸
右 小町

月は川に待くわ
うきぬ宮いそさし

思いしらのすける
おもしろや花心

思ひしらすける
梅ふや花心

左　七　孟猶

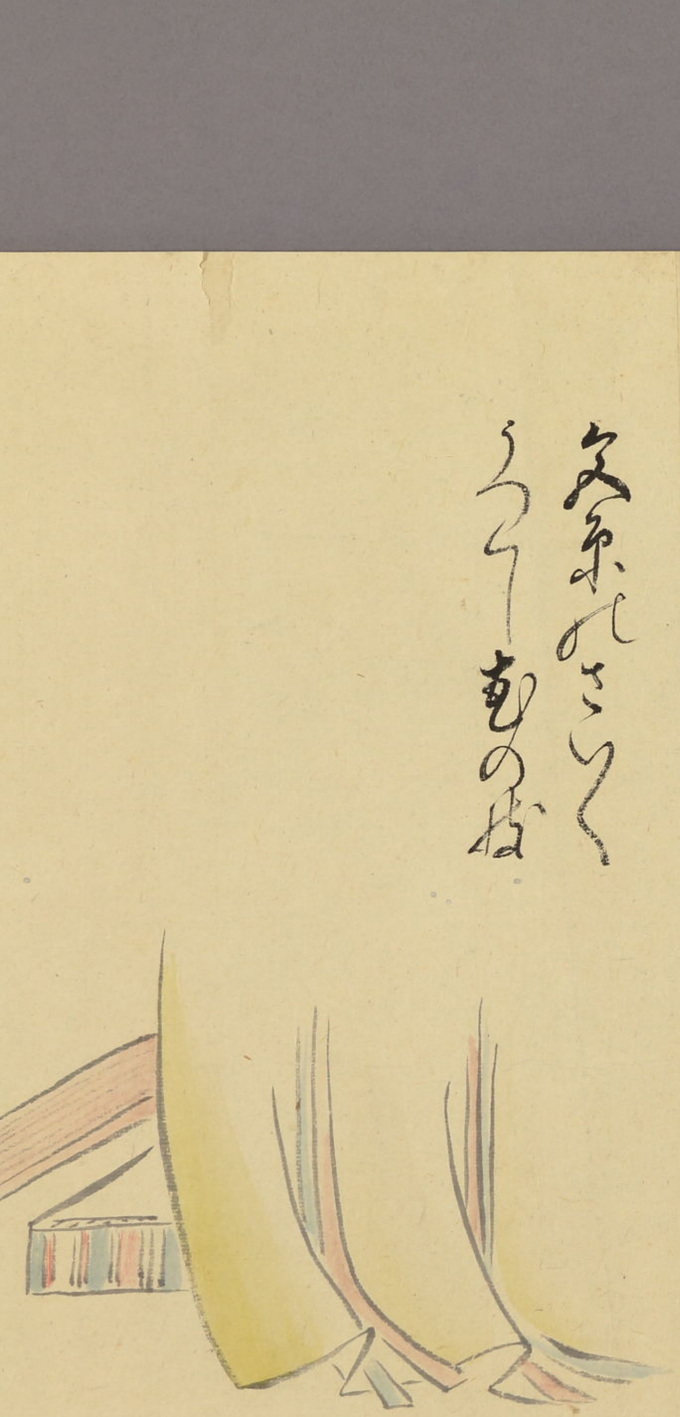
右　胡忠

掛川や走湊
たゞく月の船

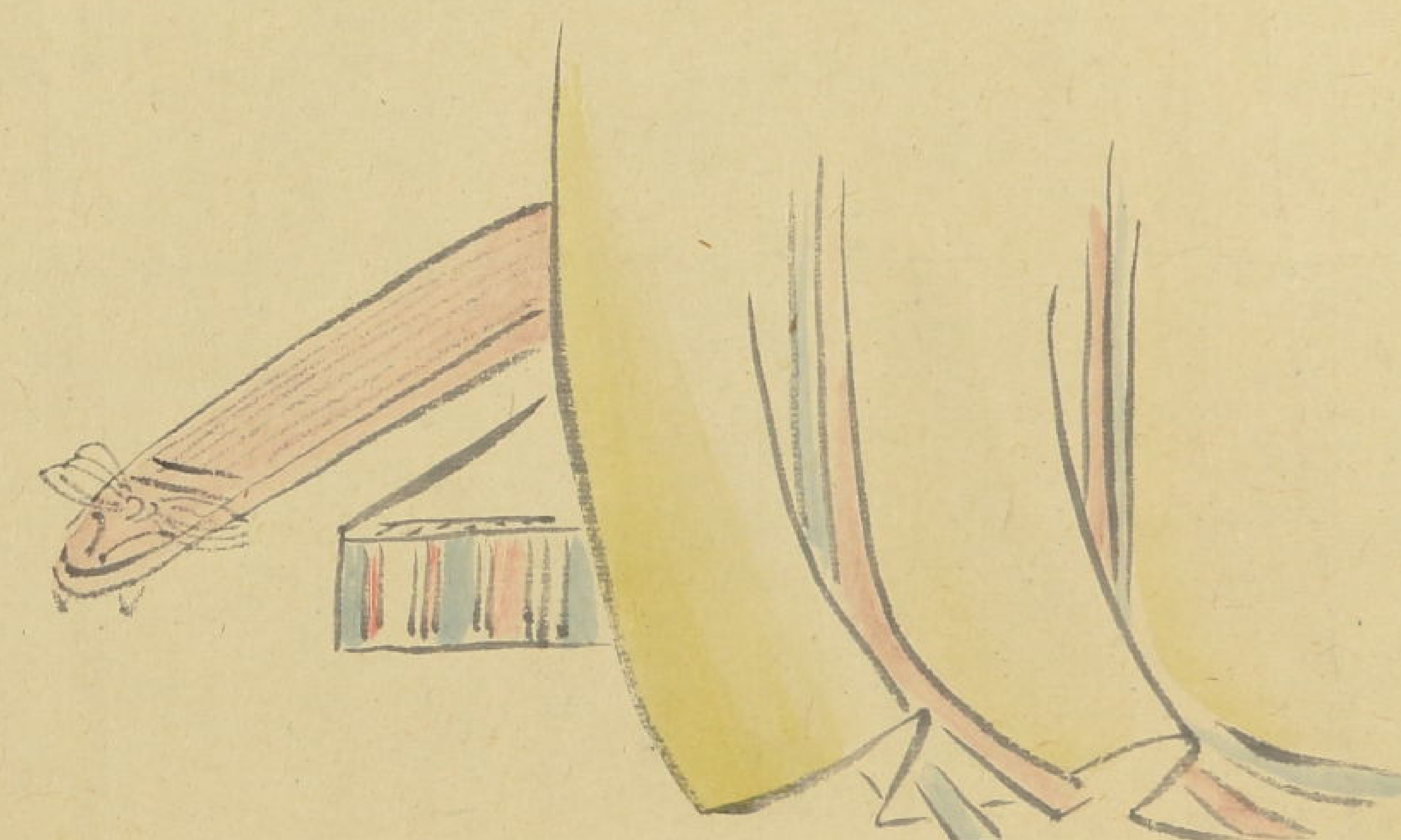
前しまく花や
ちゝれの昼さこ

右八 敦忠

右 高光



文京れさいく
うらしものを

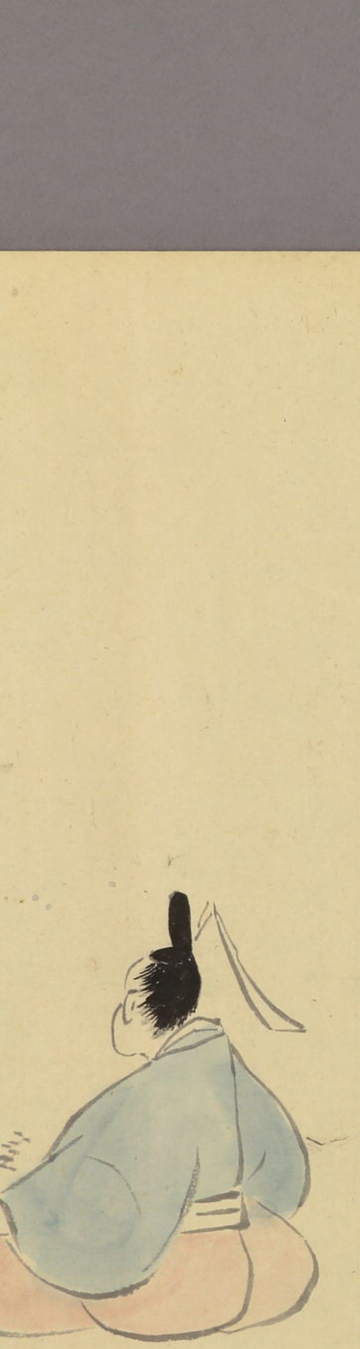


左 十
番宮

右
親基

他方ヨリ求メス
月ヤ法ノ道

あまくし年雪り
さつるや亀鑑



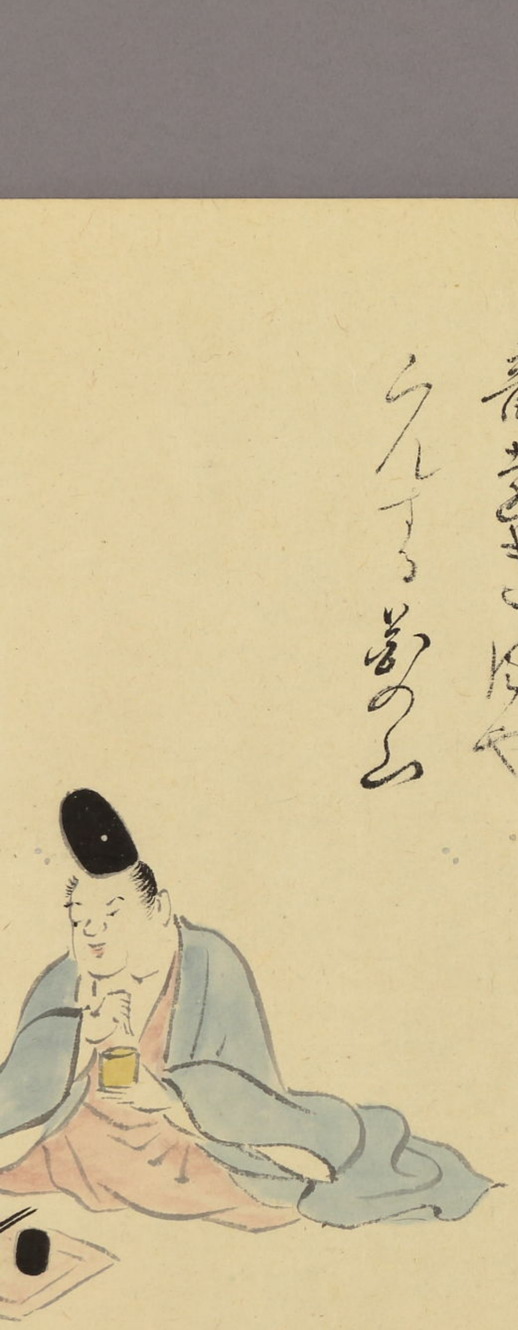
御宮のまれりゝ
ゆすや萬の使ひ

左 十二 宗干

右 信明

心のふあまりけき
形れ月見ふ

萬ら来よりて相
すきれむ乃笑



音高き風や
みんする夢の山

右 十四
其風

右
元輔

月のりとすけるや
かこと酒の酔

菊やこゑ法の
えにしくれ莚志え人

夏やきたて横(?)
おほ(?)き 水衣(?)

左 十六 小大君

右 仲家(?)

露の中にも(?)
月人 新法師(?)

花を吉野川
よ(?)き(?)く(?)(?)つ(?)

左 十七 能宣
右 忠見

清りかねと龍頭を
手にせ花れ申し

左　十八　益盛

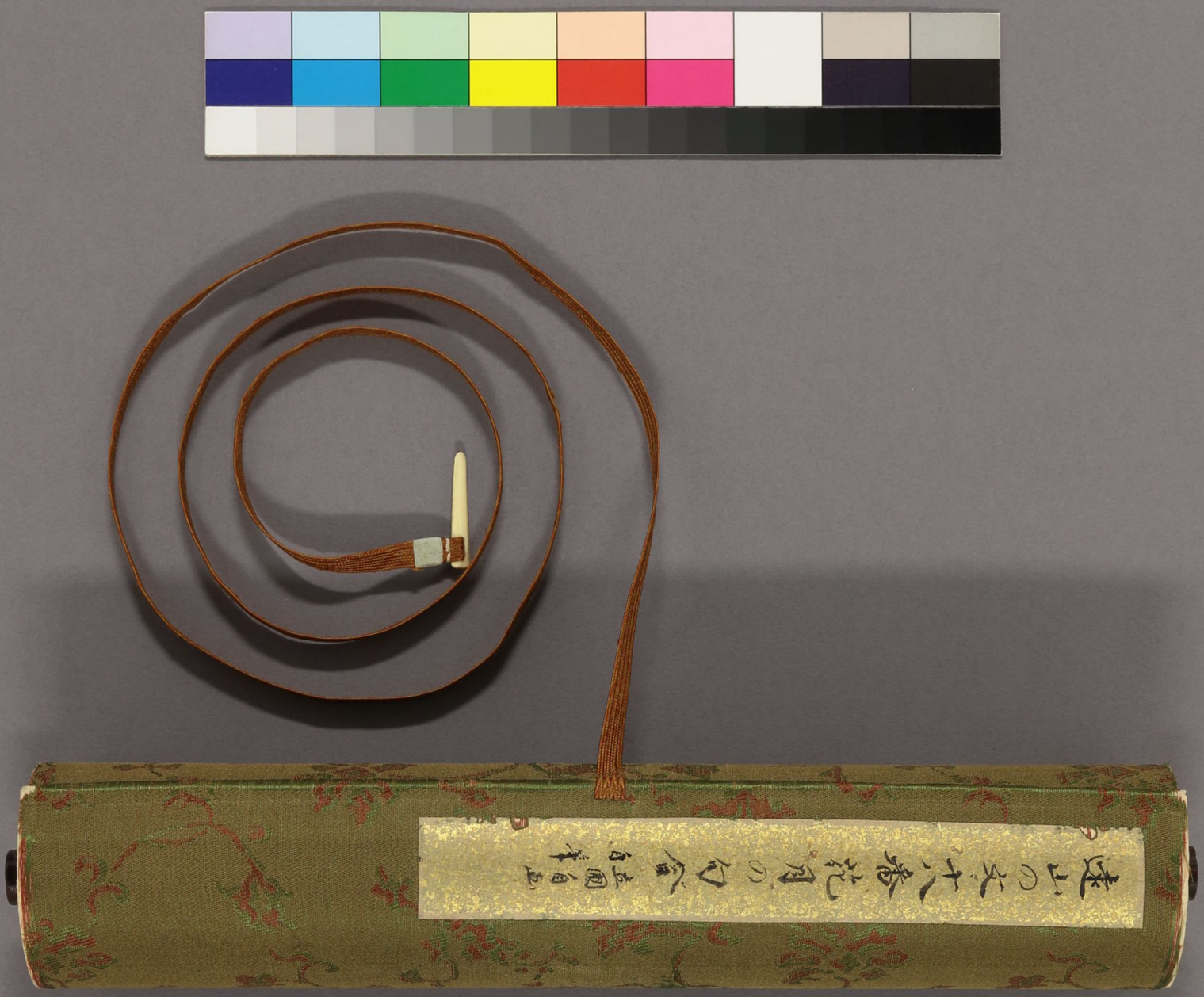
右　中勢

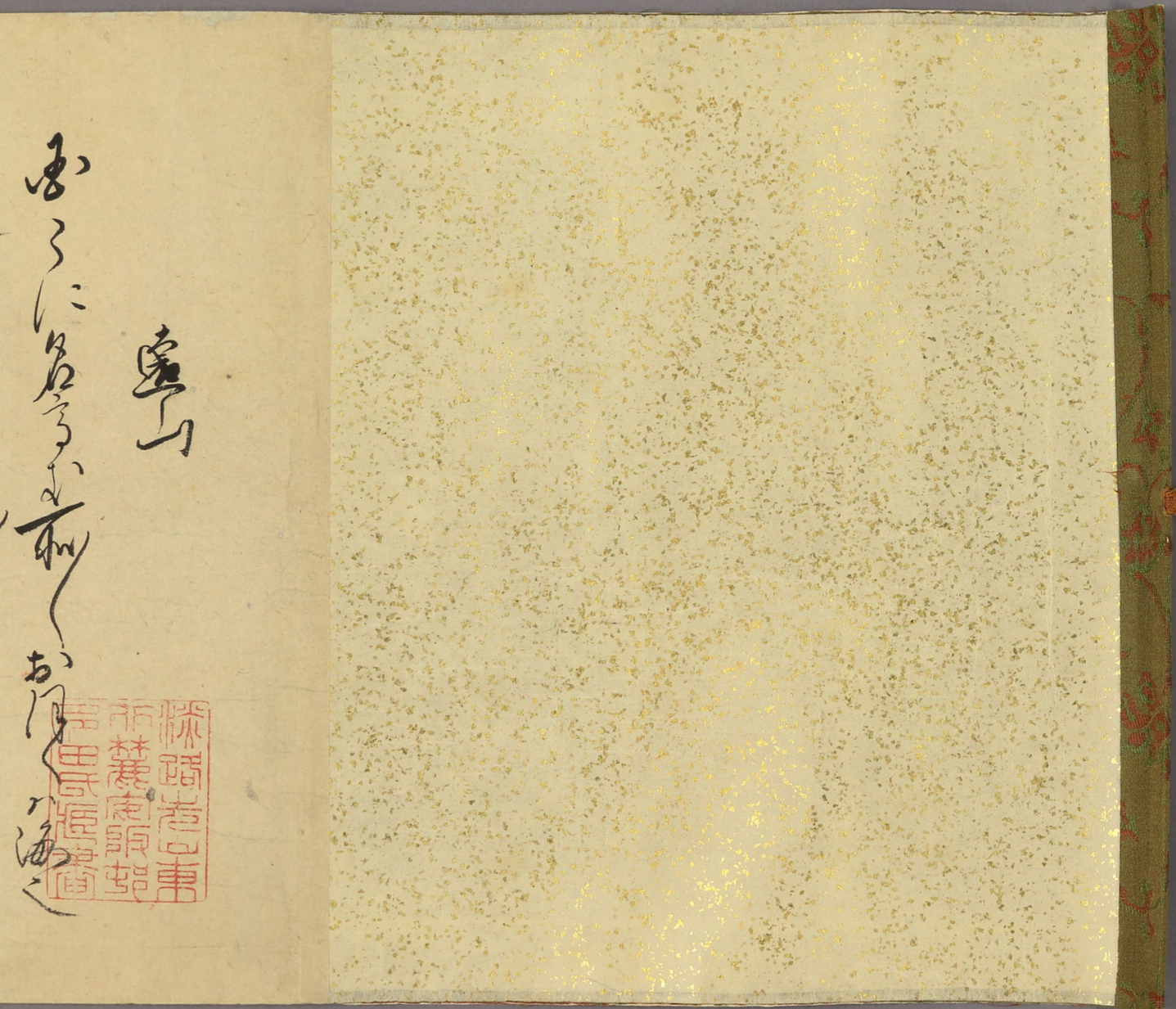
月を皆かけのさる
もや流りしら

三十六人乃まことの道に学ひ
たしけりとてあつしれ船人
和尚れ御中ゆゑんと老きたんに

三十六人乃まうての道ハ学ひ
こし時とてあし乃船人
和哥乃浦にもいさとよせきれ
かくすゝへしもちかやすまむ
さもとみくかゝりと花とおもふ
月と有りみなる至人乃
体哥の御こゝろ絵かき
そへけるなりし

立圃

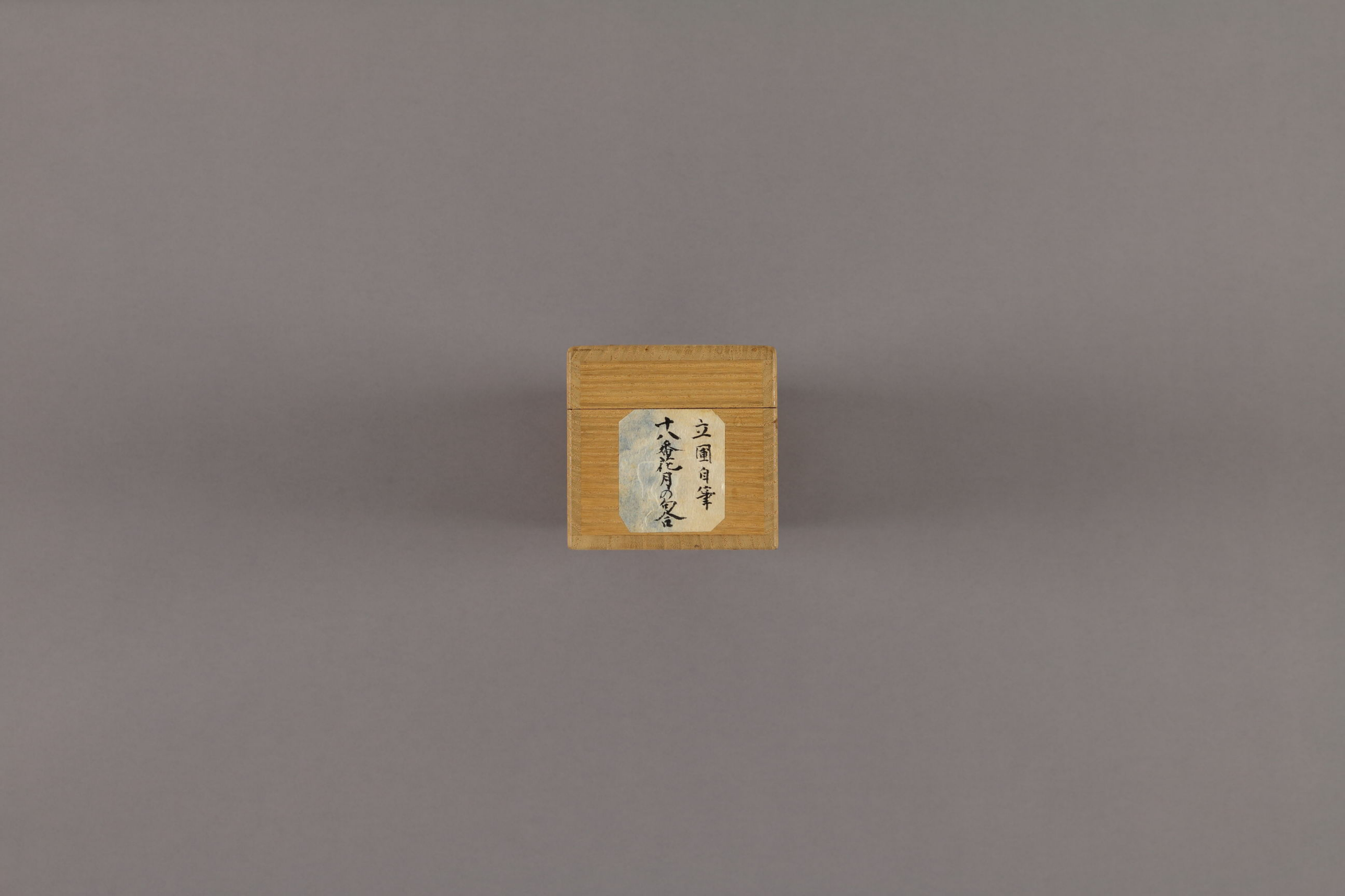




遠山の文十八番花月の句合

立圃自画

遠山の文・十八番花月の句合　鈴々口立國角筆


立圓自筆
十八番花月の句合